

日本計量生物学会

ニュース・レター No.72

2000年 8 月

目 次

巻頭言
会長の一言
日本計量生物学会2000年度総会報告
会計報告
2000年日本計量生物学会第1回理事会議事要旨
日本学会協議の報告
計量生物セミナー開催のお知らせ
国際会議のおしらせ
編集後記

丹後俊郎（国立公衆衛生院）

最近、新薬の効果の「evidenceを作るRCT」に関する欧米日の三極のICH統計ガイドラインに関連した実務に医学統計家が参加する活動が活発である。一方、既存のevidenceを整理し、それを医療現場の最前線に伝えるシステム、いわゆる、Evidence-based Medicineの普及を目指した体制作りが、厚生省では急ピッチで検討されている。EBMというと「なんでいまさらEvidence？これまでの医療にはevidenceはなかったのか？」という疑惑にも似た反論が医者、研究者、患者からも多い。そう考えている本学会の会員も多いのではないだろうか？しかし、よく考えてみると人に対する治療効果をRCTできちんと検討しはじめたのは世界的にみてもそんなに古いことではない。少なくとも日本では最近のことと言っても過言ではない。つまり、人に対する治療効果の根拠はきわめて乏しいのである。

その機能は、イギリスのコクラン共同計画がそのお手本であり、evidenceの質を評価するためのシステム（RCTを中心とした文献の系統的レビューからメタ・アナリシス

根拠に基づく医療—医学統計家の需要は増加の一途

によるevidenceの統合）、evidenceを伝えるシステム（医療現場のニーズにあった治療方針確立のための検索データベースシステムの開発）、evidenceの漏れを防ぐシステム（publication biasを無くするための臨床試験の登録と実施中の臨床試験のインターネット上での公開）、さらには、これらの根拠を集大成した治療ガイドラインの作成等である。

ところで、これらの「実務」をこなすことができる人材が日本にどれほど存在するだろうか？系統的レビューを実施するための文献検索に詳しいリサーチライブラリアン、文献の内容を専門的立場から吟味する専門医、そしてデザインの質と統計解析結果からevidence levelを評価する医学統計家、などが必要不可欠な人材である。新薬の審査センターに臨床試験の経験をつんだ医学統計家が十分にいない日本の現状で、より専門的知識が要求されるEBMまで人材が回るはずもない！という声が聞こえそうである。しかし、社会的な需要が高まっているこの時期はチャンスでもある。数理の素養があり、かつチャレンジ精神に富んだ若い人材を医学統計の分野に積極的に勧誘していただきたい。

会長の一言

吉村 功

現在私は国際計量生物学会議（IBC）の場所を決める助言者委員会のメンバーになっており、4年後のIBCの開催国を検討中です。今年のIBCはアメリカ（サンフランシスコ）、2年後のIBCはドイツ、そしてその後に応募しているのは、オーストラリアとイタリアですが、オーストラリアが有力です。国際計量生物学会（IBS）に、「原則として、アメリカ、ヨーロッパ、その他、の3極を回り持ちにする」という内規があるからです。（前回以南アフリカでした。）

もし2004年がオーストラリアということになると、その後2回はアメリカとヨーロッパになりますから、日本での開催は、それより後ということになります。この数ヶ月、理事会で2004年、あるいは2006年に日本で開催することを検討しないと、国際貢献面で恥ずかしいのではないかと、などと言っていたのですが、先送りにしたいと思えます。それにしても、やはりわれわれの弱体ぶりの現れのように思います。

そういうこともありますので、IBCへの開発途上国からの参加のための寄付（\$3,000）をずっと続けたいのですが、そのための寄付が十分に集まっていません。会員の皆さんには、特別会費一口2000円をぜひお送り下さるようお願いします。

会計報告をご覧になれば分かりますが、会誌を立派にしたことによる赤字が無視できないレベルになっています。しかし会誌の質は下げたくありません。そこで、ニュースレターの費用を削減して、記事をホームページの方に移し、ニュースレターの発行頻度を減らすことになりました。ご了承下さい。

日本計量生物学会2000年度総会報告

2000年5月11日12時10分から、合同年次大会会場の総評会館で、日本計量生物学会2000年度総会を開催しました。総会参加者数31名、また委任状提出者が計103名で総会成立が確認されました。（2000年5月現在の本学会正会員数は347名であり、会則第19条1項より70名以上の参加で総会は

成立。）

会則17条にもとづいて、総会議長は吉村会長が務めました。以下に総会議事をまとめます。

1. 1999年度活動報告

1999年5月6、7日にお茶の水総評会館において、日本計量生物学会・応用統計学会合同年次大会を開催した。10月15、16日には富士教育研修所において第7回計量生物セミナーを開催した（生物の部のテーマ「生物情報のデータマイニング」、臨床の部のテーマ「ブリッジング評価に関する統計学的考察/EBM時代の臨床統計学」）。また、10月26日に開催された第21回応用統計学会シンポジウムを協賛した。

雑誌「計量生物学」は1999年第20巻を発行し、ニュース・レターはNo.66-69を発行した。

1999年度は理事会を6回開催し、応用統計学会との統計関連連合大会実行委員会を4回、合同年次大会のプログラム編成作業委員会を1回開催した。

2. 1999年決算報告、会計監査報告

佐々木会計担当理事から、別紙決算報告にもとづいて収支の報告があった。続いて芳賀監事より、2000年4月28日に駒澤監事とともに会計監査を行い、決算報告通りであったことが述べられ、拍手により承認された。

3. 2000年予算案

佐々木理事から、別紙予算案にもとづいて説明があった。雑誌印刷を電算写植に変更したため、従来よりも印刷費がかさみ、財政的に苦しい状況である。

予算案は拍手により承認された。

4. 2000年活動予定

2000年度合同年次大会の開催（5月11、12日、総評会館）。11月10、11日に富士教育研修所にて第8回計量生物セミナーを開催予定。

雑誌「計量生物学」は、2000年第21巻を刊行予定。ニュース・レターはNo.70-73を刊行予定。

また、10月には2001-2002年の役員選挙を予定。

5. 試験統計家の資格化に関するワーキンググル

ープ報告

大橋理事（ワーキンググループ座長）から、ICH統計ガイドライン「臨床試験のための統計的原則」で新たに定められた「試験統計家」としての資格について、ワーキンググループでの議論の内容が報告された。現在のところ、正式な資格化を検討するのではなく、試験統計家として満たすべき要件をまとめる方向にあること、要件としては大学院修士レベルの統計コースを履修し統計家として臨床試験参加の実績があること、などを検討している。

近々、ワーキンググループでの検討内容を正式に公開する予定である。

6. その他

柳川理事から2001年に開催予定のISIサテライトミーティング「環境と健康：統計科学からの挑戦」について紹介があった。

学会ホームページについて、現在試作版を理事で検討中であり、近々公開する予定であることが報告された。

学会の財政問題について、A会員を本学会の中心としてとらえ、A会員拡大を目指すべきという意見、雑誌が原因なのだから、印刷費を一部著者負担とする、ニュース・レターをホームページのみの掲載とし印刷、送付をやめる、などの提案があった。これらの提案について、理事会で検討することにした。

佐藤俊哉 庶務担当理事

2000年日本計量生物学会 第1回理事会議事要旨

日時：2000年3月8日

場所：統計数理研究所特別会議室

出席者：大橋、佐藤、椿、丹後、二宮、柳川、吉村 各理事

1. 前回議事録、議事要旨について
承認された。

2. 2000年合同年次大会について

吉村会長から3月7日に開催された連絡委員会

の報告があった。また、椿プログラム編成作業委員長からプログラムについての説明があった。

3. ISIサテライトミーティング

柳川理事より、ISIサテライトミーティング「International Conference on Statistical Challenges in Environmental Health Problems」について、現在までの進行状況の報告があり、今後の方針について議論した。（2001年8月30日～9月1日、福岡ソフトリサーチパーク）

日本語のタイトルは「環境と健康：統計科学からの挑戦」とする。国際プログラム委員会と組織委員会について、メンバーの確定を急ぐ。参加費は前回のISIサテライトなみとし、日本からの参加者は1万円、外国からは100ドルとしたい。総経費としては500万円くらいを見込んでいます。

4. オンラインジャーナルについて

日本科学技術振興事業団松原氏より、電子ジャーナル支援事業「J-Stage」について説明を受けた。電子化については、今後も継続して検討する。

5. 会計報告

佐々木理事欠席のため、佐藤（俊）が資料にもとづいて簡単な説明を行った。

次回理事会

今回は、合同年次大会初日（5月11日）終了後、総評会館205室で開催予定。

佐藤俊哉

日本学術会議の報告

第4部会員 吉村 功

私の任期、第17期3年間はこの7月で終わります。これが最後の報告です。いつものことですが、私が注目した題材に焦点を絞って報告します。

6月6日から9日にかけて、総会、部会、連合部会、各種委員会といった一連の会合が行われました。総会というのは会員210人の全体集会で、外部に発表する声明、報告書などが検討されます。今回比較的大きく取り上げられたのは、常置委員

1999年度決算報告

(1999年1月1日～1999年12月31日)
[単位:円]

[一般会計]

収入の部

項目	予算額	実績	備考
・会費収入	2,500,000	2,700,500	
A会員		310,500	
B会員		2,360,000	
C会員		30,000	
・賛助会費	400,000	420,000	
・会費未収金回収	400,000	566,000	
・会費前納金	0	54,500	
・著作権料	0	56,324	学術著作権協会より(複写使用量分配)
・Journal売上	0	28,000	
・雑費	0	869	銀行利息
・前年度繰越金	1,417,850	1,417,850	
合計	4,717,850	5,244,043	

支出の部

項目	予算額	実績	備考
・本部送金*	1,637,500	1,667,008	
・印刷費	800,000	996,575	
Journal		(641,675)	Vol.20(1): 電算写植につき従来より増額
ニュースレター		(354,900)	No.66～69
・人件費	642,500	205,000	
事務費	(592,500)	(205,000)	1-3月事務費(栗原さん)、シフォニカへは翌年3月払い
アルバイト	(50,000)	0	
・通信費	300,000	500,597	Journal三回発送(増補2回含む)
・会議費	200,000	26,050	メール理事会導入効果
・消耗品費	100,000	252,025	振り込み伝票(二年分)、封筒
・雑費	25,000	15,312	払込手数料、車代等
・予備費	1,012,850		
・次年度繰越金		1,581,476	
銀行		(898,054)	
郵便局		(654,000)	
現金		(29,422)	
合計	4,717,850	5,244,043	

*本部送金 正会員:\$50.0 学生会員:\$17.0

補足

未払い費 ¥-412,500 シフォニカへの4-12月事務委託費
前払い費 ¥80,000 次年度分の伝票等印刷分
実質次年度繰越金 ¥1,248,976

[特別会計]

収入の部

(特別事業(セミナー)よりの累計借入残¥403,820)

項目	予算額	実績	備考
・前年度繰越金	90,000	90,000	
・特別会費	133,820	57,700	
・ニュースレター広告料	180,000	165,000	
・雑費	0	27	銀行利息
合計	403,820	312,727	

支出の部

項目	予算額	実績	備考
・返済金	403,820		収入が充分でなかったため返済せず
・次期繰越金	0	312,727	全額繰越金とした
合計	403,820	312,727	

(特別事業(セミナー)よりの累計借入残¥403,820)

[特別事業(第7回計量生物セミナー)]

項目	実績	備考
・前年度繰越金	2,206,245	
・第6回参加費	37,000	
・第7回参加費	3,512,000	
・第7回昼食代	127,000	
・別刷り売り上げ	18,000	
・銀行利息	1,091	
収入合計	5,901,336	
・第四回テープおこし	119,175	
・印刷費	466,252	Journal Vol.19(1,2)
・研修所支払い	1,664,710	
・講師交通費	255,000	8名分
・ナイトセッション	41,943	
・人件費	70,000	交通費含む
・送金手数料	1,155	
・次期繰越金	3,283,101	
銀行	(3,144,955)	
現金	(138,146)	
支出合計	5,901,336	

(特別会計への累計貸出残¥403,820)

会計監査報告

日本計量生物学会 殿

1999年1月1日より12月31日までの会計経理を監査した結果、会計報告の通り相違ないことを認めます。

2000年 4月28日

監事

芳賀敏郎 (印)
駒澤 勉 (印)

2000年度予算(案)

(2000年1月1日～2000年12月31日)
[単位:円]

[一般会計]

収入の部

項目	予算額	前年度予算額	前年度実績	備考
・会費収入	2,700,000	2,500,000	2,700,500	
A会費			310,500	
B会費			2,360,000	
C会費			30,000	
・賛助会費	420,000	400,000	420,000	
・会費未収金回収	300,000	400,000	566,000	
・会費前納金	0	0	54,500	
・著作権料	50,000	0	56,324	学術著作権協会より(複写使用量分配)
・Journal売上	0	0	28,000	
・雑費	0	0	869	銀行利息
・前年度繰越金	1,581,476	1,417,850	1,417,850	
合計	5,051,476	4,717,850	5,244,043	

支出の部

項目	予算額	前年度予算額	前年度実績	備考
・本部送金	1,650,000	1,637,500	1,667,008	
・印刷費	1,600,000	800,000	996,575	Journal二号分
Journal			(641,875)	
ニュースレター			(354,900)	
・人件費	550,000	642,500	205,000	
事務費	(550,000)	(592,500)	(205,000)	シンフォニカ事務委託費(1999.4-2000.3)
アルバイト		(50,000)	0	
・通信費	400,000	300,000	500,597	
・会議費	30,000	200,000	26,050	
・消耗品費	80,000	100,000	252,025	一部前年度に前払い済み
・雑費	20,000	25,000	15,312	
・予備費	721,476	1,012,850		
・次年度繰越金			1,581,476	
銀行			(898,054)	
郵便局			(654,000)	
現金			(29,422)	
合計	5,051,476	4,717,850	5,244,043	

[特別会計]

収入の部

(特別事業(セミナー)よりの累計借入残¥403,820)

項目	予算額	前年度予算額	前年度実績	備考
・前年度繰越金	312,727	90,000	90,000	
・特別会費	100,000	133,820	57,700	
・ニュースレター広告料	160,000	180,000	165,000	
・雑費	0	0	27	銀行利息
合計	572,727	403,820	312,727	

支出の部

項目	予算額	前年度予算額	前年度実績	備考
・2000年途上国援助	335,000			\$3,000(\$=¥110)+手数料
・返済金	237,727	403,820	0	
・次期繰越金	0	0	312,727	
合計	572,727	403,820	312,727	

(特別事業(セミナー)よりの累計借入残¥166,093)

会の改組と、男女共同参画の推進のことでした。

常置委員会というのは、期を超えて継続している委員会で、7つあります。これを改組して6委員会とし、名前を番号でなく内容で表わすように変えることになりました。そのときに焦点となったのが私の所属していた第2常置委員会でした。従来はこの委員会の仕事を、「学問・思想の自由並びに科学者の倫理と社会的責任及び地位の向上」としていたのですが、これを「学問の自由及び科学者の倫理・社会的貢献」と変えることになったのです。議論の焦点は、なぜ今「思想の自由、社会的責任」という表現を外さなければならないのかということでした。たとえば「思想の自由は憲法で保証されているからここで特に取り上げる必要がない」「貢献という方が積極的で前向きな表現だ」というような説明がなされましたが、腑に落ちないという顔の会員がかなりたくさんいたようです。

学術会議には、常置委員会の他に、やや臨時的な特別委員会があります。その一つが「女性科学者の環境改善の推進特別委員会」です。ここで議論されたことを基にして、次の内容の声明が学術会議として出すことになりました。

「1）日本学術会議の自己改革に関する重点項目の一つとして、女性会員の比率を今後10年間で10%まで高めるという目標値を設定する。2）学術研究団体登録手続きの様式を改訂し、代表者の性別、及び会員・役員・会誌編集委員・論文審査委員等の総数並びに男女別数を会員推薦依頼時に公表する。3）会員推薦に関する学協会等への会長要請文書等に対して、どのような対応がなされたのかを調査し、公表する。4）研究連絡委員会の女性委員比率を高めるよう、更に努力する。」

第18期の女性会員数は、この報告を書いている時点では詳細不明ですが、今期の2名より3倍以上に増えると予想されています。といっても、210名中3%程度ですので、10%の目標を達成するには、各学会での積極的な方針が必要です。統計学研究連絡委員会にも現在は女性委員がいませんが、なんとか次期には、女性委員を推薦するようお願いします。

統計学研究連絡委員会は、数学研究連絡委員会及び科学教育研究連絡委員会と一緒に、「数学教

育の改善をめざして」という表題のシンポジウムを3月24日に行いました。統計学研連からは、柳川堯、岸野洋久、大瀧慈の3氏に報告討論に参加していただきました。数学教育は統計教育とも大変関係が深いので、機会がありましたら、それぞれの方に感想や意見を尋ねてみて下さい。

従来は文部省が行っていた科学研究費補助の半分以上の部分が今年度から、学術振興会に移されています。学術振興会では、補助金の支出を今までより2ヶ月くらい早くして、5月頃から使えるようにしようとしています。その関係で、今年度は申請の時期が2ヶ月くらい早くなるはずですが。会員の皆さんは、見逃さないことと、積極的に応募をされるようお願いいたします。科研費総額は申請が多いと多くなる傾向がありますので。

計量生物セミナー開催のお知らせ

恒例の計量生物セミナーを来る11月10日（金）～11日（土）に富士教育研修所において合宿形式で開催いたします。テーマは「QOLを含む評価尺度のValidationについて」（仮題）を考えております。詳細は次号の会報にてお知らせいたします。ふるってご参加下さい。

国際会議のおしらせ

International Conference on Statistical Challenges in Environmental Health Problems

環境と健康：統計科学からの挑戦

2001年8月30日～9月1日
於 福岡ソフトリサーチパーク

ニュースレターですでお知らせしましたように、上記国際会議を日本計量生物学会主催で開催いたします。会議は、以下のような話題に関する研究交流を目的としています。

1. 生態や動植物に及ぼす内分泌攪乱物質の統計的影響評価

2. ヒトの健康に及ぼす環境汚染物質リスクの計量化
3. 健康問題に関する環境データのモデル化と統計解析
4. 環境疫学における先端的統計技法
5. 健康問題に関わる環境データの階層的ベイズ法によるモデル化
6. 毒性データの薬物動態学・毒性動態学的モデル化

現在のところ、以下のような海外の研究者から招待講演の内諾が得られています。いずれも、各分野で著名な先端的研究者です。大きな期待がもたれます。ぜひ、ご参加いただきますよう。国内からの招待講演者はまだ未定です。自薦、他薦をよろしくお願いいたします。

また、話題の提供もおねがいたします。

John A. Bailer (Miami University・教授)

Lutz Edler (German Cancer Institute・計量生物部長)

Niels Keiding (University of Copenhagen・教授)

Walter Piegorsch (Univ of South Carolina・教授)

Chris J. Portier (National Institute of Environmental Health Sciences, USA, リスク評価部長)

Silvia Richardson (INSERM・教授, France)

Louise Ryan (Harvard University・教授)

なお、本国際会議の関係者は以下のようです。プログラム委員会委員、組織委員会委員にご意見等を遠慮なくお寄せいただきますよう。

会長 吉村 功 日本計量生物学会・会長

国際プログラム委員会

委員長

Walter Piegorsch (University of South Carolina・教授, 米国)

L. Edler (German Cancer Institute・計量生物部長, ドイツ)

B-S. Kim (Yonsei University・教授, 韓国)

B.J.T. Morgan (University of Kent・教授, 英国)

大井 玄 (国立環境研究所・所長)

大橋靖雄 (東京大学大学院医学研究科・教授)

林 眞 (国立医薬品食品衛生研究所変異遺伝部・部長)

丹後俊郎 (国立公衆衛生院疫学部)

国際組織委員会

委員長

柳川 堯 (九州大学大学院数理学研究院・教授)

Abdel EL-Shaarawi (National Water Research Institute, Canada: International Environmetric Society・会長)

T. Hakulinen (Finish Cancer Registry・医用統計部長)

D.G. Hoel (Medical University of South Carolina・教授, USA)

C. Portier (National Institute of Environmental Health Sciences, USA・リスク評価部長)

安楽和夫 (西南学院大学・教授)

三輪哲久 (国立農業環境研究所)

森川敏彦 (武田薬品工業(株)・統計解析部長)

大瀧 慈 (広島大学原爆放射能医学研究所・教授)

佐藤俊哉 (京都大学大学院医学研究科・教授)

松田裕之 (東京大学海洋研究所・助教授)

吉村健清 (産業医科大学臨床疫学・教授)

吉沢 正 (筑波大学大学院社会学系・教授)

渡邊 昌 (東京農業大学・教授)

連絡責任者

環境と健康：統計科学からの挑戦国際会議 組織委員会・委員長 柳川 堯

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学大学院数理学研究院

Tel: 092-642-2765 Fax: 092-642-2779

e-mail: yanagawa@math.kyushu-u.ac.jp

編集後記

本号はいつもの号より早めのお届けとなりました。本号では、5月に行われました2000年度総会の報告、第8回計量生物セミナーのお知らせ、2001年8月に開催予定のInternational Conference on Statistical Challenges in

Environmental Health Problemsのお知らせなどが載っています。また、日本学術会議の報告では、科研費の申請時期が2ヶ月ほど早まるかもしれないという重要な情報が寄せられています。科研費は申請が多くなると多くなる傾向にあるとのことですので、統計科学部門にもたくさん申請して下さい。

会長からの一言にもありますように、当学会で

は赤字解消のために、ニュースレターをホームページ上に掲載し、郵送での発行頻度を減らすことになりました。これに対するご意見などもございましたら、ニュースレター編集委員会までお送り下さい。なお、ホームページは現在、WWW資源提供サービス申請の審査結果待ちの状態ですので、もう少しお待ち下さい。

日本計量生物学会事務局

〒107-0062 東京都港区南青山6-3-9 大和ビル2F
(財)統計情報研究開発センター内
日本計量生物学会事務局
FAX 03-5467-0482
e-mail: biometrics@sinfonica.or.jp

広報委員会 山岡和枝, 林 邦彦

山岡連絡先:

〒173-8605 板橋区加賀2-11-1
帝京大学医学部衛生学公衆衛生学教室
TEL: 03-3964-1211 (内線2178)
FAX: 03-3964-1058
e-mail: kazue@med.teikyo-u.ac.jp